東方王堕歴

新居魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方王堕歴

【Ｎコード】
Ｎ１４２２Ｌ

【作者名】
新居魁

【あらすじ】
かつて、世界を恐怖へと陥れた一人の魔王が存在した。
魔王はその余りにも強大過ぎる力により、何時も独りだった。
妖怪の賢者と呼ばれる大妖怪は、そんな魔王に強い興味を抱いていた。大妖怪には夢があった。妖怪と人間が共にいがみ合う事なく共存する世界。夢の実現には魔王の手が必要だと考えたからだ。

魔王が、王座を退いた後、二人は対面する。今思えば、それが全ての始まりだったのかもしれない。

月日は過ぎ、彼女の夢は現実となり、幻想卿と名付けられた。

と、やけにシリアスな雰囲気漂うあらすじだけど、そこまでシリアスでもない、魔王の話。

テンプレ的な幻想入り（前書き）

この物語は東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次小説です。オリジナルキャラクターが出てくるので、ご注意下さい。

主人公は設定上一応チート…？です。

段幕ガチバトルを書くことを目的としていないため、バトル要素は少なめとなります（多分）

以上の注意を読んで、それでもＯＫな方はどうぞ、ごゆっくり読んでいって下さい。

誤字脱字、がありましたら、どうかお知らせ下さい。

感想なども待ってます。

東方王堕歴を、どうぞよろしく。

テンプレ的な幻想入り

「何度聞かれたとしても、答えは変わらないのです。いい加減諦めろです」

「いいえ、何度でも言いますわ。貴女は既に幻想となった存在、こちらへ来るべきよ」

「相変わらず頑固ですね。私は昔も今も自由を愛し、我が道を行く女なのです。他人の指図なんか絶対受けてやるかです。一昨日来やがれです」

「一昨日も来たわ」

「…そうだったです」

びゅうびゅうとすきま風が吹き荒れるボロい小屋の中、そこでは二つの人影が互いに向かい合い、何時までも平行線な言い争いを延々と続けていた。

埃臭い小じんまりとした小屋と二つの影は明らかに不釣り合いな雰囲気を漂わせるそれら。それは常人には侵すことのできない、どこか別世界の空間のようで、その中心たる二人が只者では無いという確固たる証明であった。

その不思議な影のうちの一つ、それは美しい女性だった。紫の、質の良さそうなドレスと絹糸の様に艶やかに輝く柔らかな長い金髪を揺らした、息を呑むほどの、美しい、女性。

もう一つの影は、とても小さな影だった。藍色の、どこか小動物を思わせる癖のある髪。自身の見た目には無頓着なのか、ざんばらに短く切られている。同色のガラス玉の様な瞳には何も映されず、

まるで人形のような幼い少女。非力そうに白く細い体に漆黒のローブを引き摺るように羽織っていた。

「いいから帰れです。しつこい女は嫌われるです。むしろ嫌われればいいです。願ったり叶ったりです」

ぺっ。唾を吐き捨てる動作をして、何時も無表情な顔に不機嫌さを張り付ける。これ以上もう話すことは何も無いとでも言いた気に顔を背け、女性から背を向けた。

「酷いわぁ。私、とてもショックよ」

何処から取り出したのか、女性は手にしている扇子を少しばかり開き、口元へ当てながらどこか胡散臭い笑みを浮かべた。動作一つ一つが一々演技がかっていて、それが素晴らしく様になっている。何処までが本心なのか、それとも相手をおちょくっているだけなのか、判別がつけずらい。

「けっ、幾らでも泣けばいいです。良い気味です」

ぺっぺっ、と再び唾を撒き散らす少女。幼い風貌のせいか、口汚い言葉や仕草さえどこか微笑ましく感じてしまう。まるで子供が親や大人に反抗してくるかのようだ。

「幻想郷が嫌いと言うわけでは無いのでしょう」

「嫌いなわけが無いのです。あそこは、私の第二の故郷ですよ」

「じゃあ、何故そこまで拒むのかしら？貴女の帰りを待っている妖怪も少なくは無いと言うのに」

いくら説得しても、決して首を縦に振ろうとしない少女に金髪の女性は訝しげにそう訪ねると、今までどんな言葉にも動じなかった少女は突然目に見えて動揺しだし、目をきょろきょろと忙しなく動かした。

「ななな、何でもねぇですっ。理由なんてあるわけ無いでありますよ！」

「…ここまで分かりやすいと逆に演技のようね」

女性は呆れ半分、驚き半分に息を吐く。

「べべべべ別に？幽香から逃げてきたわけじゃ無いですからねっ！？事故で向日葵折っちゃって、幽香が物凄い顔で追いかけて来るから、逃げているうちにいつの間にか外に出てたんじゃないですから！」

ほんの少し顔を赤く染めて、微かに顔色を焦りと羞恥へと変える。常に無表情を保つ少女にしては、とても珍しい光景だった。

その言葉を聞いた女性は今度は完全に呆れた顔で少女を眺め、深い溜め息を吐いた。目線も心なしか冷たい。

「あの子が山を消し飛ばしながら怒り狂っていたのって、貴女のせいだったのね…」

その後も少女は五分近くぎゃあぎゃあと一人で騒ぎ続けた後、ようやく落ち着いたのか、一瞬にして元の無表情へと戻り、気まず気に二、三咳払いを吐いた。

「つまり今までの話からまとめると、貴女は幽香から逃げ続けているうちに何故か外に出ていて、何故幻想郷へ帰らずふらふらしていたのかと言うと、怒っている幽香に会うのが怖いのと今更ノコノコ帰るのが気まずいし恥ずかしい、と言うことね」

「まあ、そう言うことになるのですよ。いわゆる一種の意地みたいなものですね」

すっかり元の調子を取り戻した少女は、開き直った様に無駄に堂々と宣言した。ふふん、とぺったんこの胸を思いっきり主張するかのように張る。

それを見た女性は心底呆れたように目を瞑り、天を仰ぐ。普段の彼女からは全く想像できないその姿。おそらく、彼女を知る者からすれば、それはあり得ないものだろう。自由奔放、傍若無人。むしろ人を振り回し、手のひらで踊らせて楽しむのは彼女の専門特化なのだから。

「呆れたわ…。私はそんな理由の為に大切な睡眠時間を削って必死に説得をしていたと言う訳ね」

「そんな理由とは失礼な。私にとっては生死すら別つ重要なことなのです」

少女の言葉に溜め息を吐くことで返事する。彼女と一緒にいると何故か溜め息が増える。私は振り回す専門なのに、彼女からはいつも振り回されっぱなしだ、と女性は少し釈然としない表情を浮かべた。

「私にとっては今最も優先すべき事項なのです。当分は変わらないでしょう、具体的には一世紀ほど」

「……もう決めたわ」

「…？何をですか」

偉そうにふんぞり反っていた少女が不思議そうに小首を傾げる。

「…貴方を」

女性が右手を自然な動作で前へと出し、ゆっくりと横へスライドさせる。目がすぅ、と細くなり、狙いを付けるように少女を射止める。

「へっ！？」

突然消え失せる地面。体ががくり、と沈む感覚に少女は珍しく焦りの声を上げた。

重力に従い、落下する身体。慌てて飛行して逃れようと試みるが、どこからともなく出てきた無数の腕に足を絡め取られ、引きずり

重力に従い、落下する身体。下を見ると、そこに広がるのはひたすらの闇。底などは見えるはずもなく、何か蠢くような禍々しい雰囲気を放ち続けている。それは空間を引き裂いたかのように不自然に出現した。

それを見た少女は慌てて飛行をすることで、それから逃れようと試みるが、どこからともなく出てきた無数の腕に足を絡め取られ、引きずり込まれた。

「貴女を、無理矢理にでも幻想郷へ連れて帰ることをよ」

そう、くすくすと笑いながら自らも新しく開けた隙間に身を沈めた。ゆっくりと、そして優雅に隙間の中で少女の隣へと移動し、その小さな体を纏うローブに付いたフードをがっしりと掴んだ。

「うふふふ…。一名様ご案内〜」

「離せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……！」

否応なしにズルズルと、確実に引き込まれる身体。涙目になりながらの必死の抵抗も虚しく、引っ張られたフードに息苦しさを覚えながら、少女はその世界から消えた。

かくして、かつて世界を恐怖へと陥れた魔王は妖怪の賢者八雲紫によって再び幻想の地へと降り立つのであった。

変わるもの、変わらざるもの

無数の目と数多くの腕、道路標識が漂う、禍々ししく、そして果てしなく謎に包まれた空間、通称スキマ。かつては結界の外側に住んでいた外来人の殆どが、このスキマを通ることで幻想入りを果たしてきた。

そのスキマを操ることができるのは、一人の妖怪。『境界を操る程度の能力』を有した大妖怪、八雲紫。幻想郷の管理人たる彼女が数多くの外来人を幻想郷へ誘う理由は実に数多である。

それは曰く、人間と妖怪のバランスを保つための補充要員であったり、ただ妖怪の餌にするためだったり、彼女の単なる暇つぶしの為だったりもするならば、寝ぼけた彼女が無意識にその能力を使ってしまったが為であったりと実に様々である。そんな彼女によって隙間へと連れ込まれた者が、ここにも一人存在していた。

彼女の名はカイレイン。嘗ては恐怖の大魔王とまで言われ、世界の頂上に君臨していた過去を持つ。

しかしながら、そんな彼女の外見は、魔王などと言う肩書きからはとうてい想像などできないほどにか細く、そして何処までも可憐なのであった。

ようやく二桁へと届いたほどにしか見えない、小さく、幼い少女。柔らかな藍色の髪をざんばらに切り、人形のように整った、表情を映すことを忘れた顔髪と同色のビー玉のような大きく愛らしい瞳があった。

まるで遠くを見据えているかのような、深くて真っ直ぐな眼差し。その瞳を見たのならば、あるいは彼女が世界を統べる存在であると認めざるを得ないのかもしれない。そう感じてしまうほどに、彼女

の藍色の瞳には確かな時間の経過と力が見てとれるのだ。
小さな体躯に不釣り合いなぶかぶかした漆黒のローブの裾をはためかせ、スキマをふわふわと漂う彼女を見れば、力の無いただの無邪気な幼子にしか見えないのだが、その内に秘められた莫大な妖力と魔力は幻想郷でもトップクラスだと確実に言えるだろう。
そして事実、彼女はかつて幻想郷最強の一角を担っていたのだった。
そんな存在が再び幻想の地へと帰ってきたのだ。何か面白いことが起きたとしても不思議ではない。むしろ起きることが自然だと言いきれる。そう思うと、紫は自然と緩む口元を隠すことができなかった。
「…さっきから何にやけているのですか。気持ち悪いのですよ」
紫が視線を横へ向けるとそこには彼の少女、カイレインが訝しげにこちらを見ていた。眼差しにはどこか、可哀想な者を見るかのような哀れみさえ感じられる。冷めた目だった。
「気持ち悪いだなんて、酷いわぁ。私はただ、これからの出来事への期待を隠しきれないだけ」
「一体、貴女は私に何をさせるつもりなのですか」
「何、と決まっているわけではないわ。貴女は貴女の思うように、好きなように行動すればそれでいい。結果は自ずと付いてくるものよ。それが貴女や私の望んだものかどうかは別として、ね」
そう言うこと紫は扇子で口元を覆い隠し、さも愉し気にくすくす

と笑った。

「…嫌な予感しかしないのです」

げんなりとした顔を浮かべるカイレイン。その顔には僅かながら、確かに諦めと疲れが見てとれた。

「ほら、あそこ。出口が見えたわ」

カイレインの反応を存分に愉しんでいた紫が前方へ指を指す。指された方向には小さな光が見えていた。

「彼処を潜ればそこはもう、幻想郷。貴女は再び幻想の者となる」

「…心配しなくても、もう逃げる気は毛頭ないのです。激しく今更です。私は再び幻想の者となることを既に受け入れ済みなのですから」

首をこくこくと頷かせながら肯定の意を表する。

「あら、ずいぶんと諦めが良いわね。もっと抵抗するかと思ったわ」

「もういいです。逃げようとしてもスキマの中ではどうにもならないのですし、幻想郷へたどり着いた後にもどうせ紫のことですから、根回しなんかして戻れなくするのでしょう。スキマに引きずり込まれた時点で既にチェックメイトです」

「あら、流石ね。私のことをよく分かっているわ」

「何気に付き合いも長いですから」

満足気な紫に溜め息を吐く。何かを考え、自らの中で咀嚼するかのように瞳を強く閉じて静かに息を吸っては吐く。

「それに、私の得意なことは現状を受け入れ、最良の選択を下すことです。幻想郷が嫌いなわけでも、私に害をなすわけでもないのだから、幻想郷ライフを楽しむことにするのですよ。それに、少し楽しみになってきたところです」

再び開いたその瞳に迷いや諦めがなどはもう無い。そこにはただ、息を呑んでしまうほどの深く鈍い輝きが称えられていた。

「そう、それが良いわ。幻想郷は全てを受け入れる。それは残酷なことですわ」

カイレインは一度紫を見つめ、小さく頷くと、出口へ一気に飛び込んだ。

スキマを抜けると空だった。

突き抜けるほどに清々しい快晴の空。まだ高い位置にある太陽が燦々と照りつけ、ほんの少し前までスキマなんて言う暗くて鬱蒼とした、鬱になりそうな空間に居たためか、突然の突き刺さるほどの強い光に眼の奥がズキリ、と痛んだ。

「ちょ、これ何てテンプレ的展開ですか。ある意味予想通り過ぎて泣けてくるですよ」

瞬時に飛行魔法を展開し、一瞬の焦りも困惑も無く、限りなく冷めた口調で吐き捨てながら体制を立て直した。

「あら、全く慌てないのね。つまらない」

「何ですか、その物言いは。全く持って失礼な奴ですね」

カイレインの隣を、日傘をさしながら優雅に舞う紫は先の言葉とは少しも合致のしない、大して落胆した様子もなく、相も変わらずに胡散臭い微笑みを浮かべていた。まるでその切り返しが予想通りだった、などと言いた気に。

「うふふふふ、久しぶりの幻想郷でしょう、カイン？　だからこの幻想郷を始めに一望できる方が良いと思ったのよ」

「…その気遣いは大変嬉しいですね。…ええ、本当に、久しぶり、です。ああ、もっと私の知らない幻想郷へ変わってしまっていると思っていたのですが…、あまり変わっていないのです」

もちろん変わっている所もあるですが、とカイレインはぽつり、と続けた。その声には驚きと、感動と、喜びと、悲しみと。様々な感情がぐちゃぐちゃに入り交じり一つになったようであった。

「ここは時の流れがあまり速くないのよ。そうだとしても、万物は流転し、生有るものは死を迎える。変わらないものなんて、そうそう無いわ」

「だけど、そうだからこそ、世界は美しい」

「ええ」

目を細め、今ある幻想郷の姿を瞳の奥に焼き付ける。きっと、明日はまた違う顔を見せてくれるだろうから。この一瞬はこれから一生、見ることは出来ないだろう。

何秒経っただろうか、それとも何分経ったのだろうか。十二分にその姿を眺めた頃、カイレインの傍らに静かに佇んでいた紫が口を開いた。

「いいかしら」

その言葉に、こくりと小さく頷いて視線を紫へ向けるカイレイン。その顔はどこか満足気だった。

「行きましょうか」

「一先ずはマヨヒガへ。藍が待っているわ」

そう言うと、紫は日傘をくるり、と回し、空を蹴って飛んだ。ちらりともう一度だけ視線を巡らせた後、カイレインは先を行く紫の横へ飛んでいった。

マヨヒガにて

「お久しぶりです、カイン様、お待ちしておりました」

そこで待っていたのは、九つの狐の尻尾を生やした一人の妖獣だった。紫と同じ金色の髪をボブ程に切り揃えた、落ち着いた雰囲気の女性。彼女の名前は八雲藍。他ならぬ八雲紫の忠実なる式である。

その立派なふさふさの尻尾と、今は帽子に隠れている頭から生えた耳から察する通り、彼女は彼の有名な九尾の狐である。妖獣というものは自身の持つ尻尾の数と大きさに比例し、多ければ多いほど、大きく長ければそうであるほどに力を有すると言われており、九尾の狐というのは正に最高ランクの妖獣で、藍はその九尾の狐という種の特性に漏れること無く、かなりの力を持つ存在なのだ。

しかしながら、翌々考えてみるならばそんな彼女を従えている紫という存在は、そのさらに上を行く力を持っているということの証明になる。紫の実力が他とは桁外れであるのが、この事実からも十分伺えることだろう。

また、藍は主人である紫を大変に尊敬し、逆に紫は藍をあらゆる意味で可愛がっている。この主従には見えない絆で結ばれているのだ。

八雲紫と八雲藍。この二人が本気でタッグを組んだとき、正に敵無しと言っても過言ではなく、まともにやりあえる存在はこの幻想郷にそうそういないだろう。もしもいたとしても、その数はおそらくたかが知れている。

「久しぶりなのです、藍。元気そうで何よりです」

藍とカイレインは言うまでもなく長い付き合いのある、互いに気の知れた仲だった。

自分の主である紫の古くからの友人であり、その関係は親友と言っても良いほどに深い。その実力と能力も去ることながら、藍はカイレインの在り方に一目置いているのだ。自らの力と能力に溺れることも、よがることも無く、人知れず努力をすることを怠らない。全てを受け入れ、認めることを知る、聡く、優しいその心を。当の本人に言えば、過大評価だ、と認めようとはしないのだが。藍にとってカイレインは憧れすら抱く高みだった。

一方のカイレインも、藍が紫に式を打たれた頃から見てきた。藍を見守るその目はさながら子を見守る親の様に柔らかく、優しい。また、その働きも高く評価していた。サボり癖のある紫に代わり、本当に良く働いてくれていると感謝の念すら覚えている。

居間に通され、出された茶をちびちびと啜る。猫舌気味なカイレインを配慮した、若干温めな、しかし美味しいお茶だった。

「さて、藍。今日は旧友の帰郷を祝って、ささやかな宴会でも開きましょうか。幽々子達や萃香達でも誘って」

お茶請けの饅頭をかじっていた紫がそう提案する。カイレインもそれにあやかり三、四個ほど頬にぎゅうぎゅうと半ば無理矢理饅頭を詰め込んでいた。

「ふぉへふぁひふぃふぁんふぁえふぁほふぇふふぇ。ひふぁひふふぃひはふぇるふぁんふぇ、ふぁほふぃひふぁほふぇふ」

口の中から饅頭が溢れ落ちないように両手で口を押さえ込みながらしきりにこくこくと頷く。その姿はまるで小動物のようで、彼女の幼い容姿とも合わさり、可愛らしい。が、いかんせん何が言いたいか分からない上に行儀が悪い。

紫は扇子でカイレインの頭をぺし、と叩き、その行動をたしなめた。

「口の中の物を無くしてからにしなさい。行儀が悪いわ」

スキマを使ってしょっちゅうつまみ食いをする紫が行儀を指摘するのは、果たしてどうかとカイレインはふと思ったのだが、ここはおとなしく頷くことにした。今の紫の指摘は正しい。

四、五回大きく咀嚼し、手元にあった飲みかけのお茶で一気に流し込む。ごくり、と大きな音を発てながら、饅頭を無理矢理嚥下した。

「ふぅ…。それは良い考えなのですね。久しぶりに会えるなんて楽しみです」

一息吐いた後、まるで何事もなかったかのように仕切り直す。切り替えの早さはお墨付きである。

「失礼します、カイン様」

カイレインの口まわりに付いた饅頭のかすをティッシュで素早く拭き取った藍は、ゴミ箱へそれを捨てた。

「では紫様、少し買い出しへ出かけて参ります」

白玉楼の姫が来るのならば、おそらく食材が足りなくなるし、鬼が来るのならば酒が足りなくなる。藍はマヨヒガに貯蔵してある残りを思い出しながら、脳内で買い物リストをピックアップしていった。

「ええ、行ってらっしゃい。とびきりの良いお酒も忘れずにね」

その言葉に短く返事をした藍は、紫とカイレインへ一礼し、音もなく退室した。一連の動作に無駄など無く、全く、良くできた子だと毎回のことながらカイレインは感心する。

「紫にはもったいないです…」

気付かぬうちにぽろりて溢れた本音。

「あげないわよ？」

「分かっているです」

自慢気にニヤニヤと見てくる紫をふん、と鼻で笑い飛ばし、猫舌にはちょうどいい程に冷めて温くなっていた紫の茶を引ったくるように奪い、一気に煽った。

「…さて」

意味をさほど持たないような雑談を数十分ほど交わしたカイレインは、よいしょ、と座布団から立ち上がってローブをぱんぱん、と数回はらった。

「あら、お出かけ？」

「まだ時間があるので、放置し続けた我が家の様子を見てくるのです。日が暮れる迄には帰ってくるのですよ」

すると紫は、右手で小さなスキマを開けると、そこに手を差し込んで、ごそごそと漁りだした。

「少し待ちなさい」

なかなか探し物が見つからないのか、痺れを切らした紫はスキマの大きさを人一人入れる程に拡げ、上半身を突っ込んだ。

「…あれ、おかしいわね。確か…、この辺に…」

「…」

上半身の消えた女性がつま先立ちになってごそごそと動くという、余りにもシュールと言うか、気味の悪い光景にカイレインは呆れる。ぽいぽい、とスキマの中からありえない量のガラクタが飛び出す。いったい何故こんなにもスキマに入っているのだろうか、収集癖でもあるのか。…と言うか、何故これを持っているのか…。

カイレインはその視界に飛び込んできたメイド服やネコミミ、スクール水着を見、戦慄した。しかもご丁寧に胸元には「ゆかり」と平仮名ででかでかと名札が付いている。こいつはこんなものを着るつもりなのか。歳を考えろよ。

「あ、あったわ」

カイレインが紫への認識を改めようか本気で悩んでいた頃、当の紫は嬉々とした表情でスキマがら出てきた。探し物が見つかったのか、その手には二枚の札が握られている。

「一応、貴女に渡しておくわ」

「これは？」

受け取った札にはそれぞれ異なった文字が描かれており、術でもかけてあるのか、薄っすらと妖力を感じることが出来た。

「こっちの札は通信符よ。私と藍に繋がるようにしてあるわ。もう一つはここ、マヨヒガまでのスキマを開く符。帰ってくる時に使いなさい」

二つを受け取ったカイレインは、それぞれを確認するように見つめると、大切そうにローブの内ポケットへとしまった。

「感謝するのです」

ぺこり、と小さく頭を下げ、感謝の意を表す。唇の両端がほんの少しだけ嬉しげにつり上がった。

「では、行ってくるのです」

「行ってらっしゃい」

長く大きな漆黒のローブの裾を翻し、縁側を蹴って飛び立つ。少しスピードを上げて飛ぼうか。何だか今はそんな気分だった。カイレインは綺麗に澄んだ、幻想郷の空気を胸一杯に吸い込み、風を切

るように幻想の空を駆け抜けた。

懐かしの我が家

幻想郷の空気を胸一杯に吸い込み、自分が再びこの幻想の地へ帰ってきたことを噛み締めながら飛ぶ。
外の喧しく、忙しない空気とは違う、どこか落ち着いたのどかな空。空気は澄み渡り、仄かにする清々しい自然の香りがカイレインの鼻腔をくすぐった。

びゅんびゅんと自分の真下を過ぎ去っていく、様々な景色を楽しそうに眺めながら、カイレインはまるで空と戯れるかのようにくるりくるりと舞うように飛んだ。
そういえば、こうして人目を気にせずに自由飛行をするのも随分と久しぶりのことである。

外の世界の人間は飛べない。それは誰しもが知る常識だ。それ故に人のカタチをとっているカイレインが空を飛ぶことは非常識として認識されてしまうのだ。外の世界の人間に見られでもすればちょっとした騒ぎでは済ませられない。飛行をしたいのならば、絶対に誰にも見つからない場所で、周りを警戒しながら飛ぶしかない。
空と、空を飛ぶことを愛するカイレインにとってそれは思っていたよりも過大なストレスとなって蝕んでいた。

目的地は、とある森の奥深い所。薄暗いその森には、おびただしい量の様々な茸と木々が生い茂り、一年中じめじめとした空気が漂っていた。
人体に有害な茸から日々巻き散らかされる胞子と障気。普通の人間が吸ったならば、たちまち発熱作用や幻覚症状が現れるため、誰

も好んでその森に近付こうとしないため、人気が極端に少なかった。ただ、その森の化け物茸がもたらす空気というのは、どうやら魔法使い達にとっては最高の空気らしく、秘密主義の多い魔法使いたちはよく森の中にひっそりと住み着き、修行に励んでいた。

森の名前は魔法の森。
原生林の生い茂る幻想郷一大きな森である。

カイレインの家があるのは誰も近付こうしない魔法の森の奥の奥。森の端を抜けた先にあるという再思の道の程近い場所に、人目を避けるかの如く、ひっそりと佇んでいた。
赤い屋根と煙突が特徴的な小さな洋風の家。リビングに取り付けられた、ひときわ大きな窓からは一面に広がる彼岸花が見え、カイレインはその風景を眺めるのがお気に入りだった。

本来、彼岸花とは毒を持つ花ため、鑑賞には向かないものなのだが、彼岸花程度の毒など、カイレインには有っても無くても変わらないほどに無意味なもののため、気が向いたならば彼岸花と直接触れ合いを行っていた。

魔法の森上空を少し飛ばし気味に渡る。急ぐ必要はこれと言って無いのだが、懐かしの我が家とあの花畑に帰れるためか、気持ちが若干競っているようだった。そのせいだろうか、もう少し遠くにあると思っていた見慣れた風景は、意外にも速く、既に目と鼻の先まで迫っていた。

息を飲むような、見渡す限りの赤い、彼岸花の海。その近くに寄

り添う、小さく開けた土地に佇む一つの家。自分の記憶と全く違わないその場所へと、カイレインは迷わず急降下し、家の入口すぐ近くにゆっくりと降り立った。

この家を離れてどれくらい経ったのだろうか。カイレインは懐かしげに扉の取っ手を撫でた。金属特有の冷たさが手の熱を奪い去る。鈍い色に輝くそれは、以前と変わること無く、彼女を迎え入れていた。

この家を建設する時、これでもか、と言うほどに柱一つ一つから魔力を込めながら建てた。至る壁や屋根に符と魔法を施したため、見た目はただの小さな家なのだが、その頑丈さは下手な要塞より凄まじく高い代物になっていた。そのためか、数十、下手したならば百単位で放置し続けたにも関わらず、窓一つ、柱一つ劣化した様子が微塵も無かった。

人避けの結界も功を為したのだろう、どうやら内装が妖精に悪戯されている様子も妖獣に荒らされた様子も無く、最後にこの家を出た時のままだった。

カイレインは満足げに首を大きく頷かせた。

魔王、それも初代であるカイレインは当然のように魔法を行使出来る、が魔法使いではない。強いて言うなれば妖怪だ。本来、魔王と言うのは職業名のような物である。魔王としての素質と力があり、尚且つ部下を侍らせられるだけのカリスマ性と絶対的な能力があるのならば、例え人間だろうと極端に言ってしまえば妖精だろうと魔王の名を冠することができるのだ。実際、今代の魔王は人間だったはずだ。

その、魔王に成るための必須条件の一つが、魔法の使用が可能であることなのだ。例に漏れずカイレインも魔法が使用出来る。もっとも、魔法使いのように魔法の研究や開発まではしないなれど、その腕を鈍らせないための鍛錬は欠かすことは無かった。基本的にカイレインは生真面目な性格なのだ。

生粋の魔法使いには遅れをとっていまうが、十分食らい付いていける実力を兼ね揃えてある。

ドアノブを捻り、扉を開けた。音も発てることなく静かに開いたそれを、中へ入った後で後ろ手にそっと閉める。

埃っぽい空気が宙に舞った。藍辺りが時々掃除でもしてくれていたのだろうか、しかし想像したより遥かに綺麗だった。使用・掃除不可能な程に埃と汚れにまみれていると思っていたのだが、十分すぎるほどに使用が可能だ。嬉しい誤算だった。

だからと言って埃が溜まっていることに変わりはない。窓と言う窓を全て開け放ち、空気の入れ替えをした。

「後日、本格的に大掃除ですね」

一通り部屋を見て回ったカイレインは、ふぅ、と小さく息を吐いた後、呟いた。棚の上の埃が若干舞う。眉を潜めてそれを眺めた後、窓をそのままに外へ出ることにした。何だか鼻がむずむずしてきた。

空を見上げると太陽はまだ十分に高い場所にある。日暮れまで時間はまだまだあるようだ。

空いた時間をどう活用しようか。彼女は腕を軽く組んで考えるよ

うな素振りを見せた。
今から掃除を始めたとしても、時間的におそらく中途半端になってしまうだろうから、後日日を改めた方が良い。
知り合い達の挨拶周りにでも行こうか。いや、慌ただしく済ましてしまうのは何だか勿体無い。ゆっくりとまた伺うとしよう。

ならば。

カイレインはくるり、と身を翻して歩き出す。木と木の間をすり抜けるように通り、その足取りは迷うことも無く、ある一方へと向けられていた。

木々を抜けた先、そこにあったのは先程上空から一望した、あの一面の彼岸花畑だった。

花を踏まないように注意しながら、そろそろと移動し、静かに座る。何処からと無く風が吹き抜け、カイレインのローブと、短い髪と、真っ赤な彼岸花を揺らした。

風を全身で十分に堪能した後、優しく撫でるようにそっと近くにあった花に触る。力を少しでも込めてしまえば手折れてしまいそうな程に細く、儚い。だがそんな繊細さや脆さこそが美しいのだ、と彼女は感じた。

カイレインは穏やかな気持ちのまま、風や花ね音に耳を傾けるかの様に目を閉じた。視界が消えることによって澄まされた耳。様々な音が様々な場所から流れ、カイレインを包んでいるかのような錯覚さえ覚える。

花と花が風によって擦れ会う淡い音、風通り過ぎる柔らかな音、そして――

「あら、随分と懐かしい顔があるわね」

――背筋に冷たい何かが走る。仄かな殺気と嫌な予感を孕んだ、聞き覚えのある、誰かの声がした。

幽香襲来

突然話しかけられた、その声が耳にへと届いたその一瞬にして思いっきり顔を硬直させる。両目はこれでもか、という程に見開き、視線を気まず気にふらふらと漂わせて。頬は盛大に強張り、カイレインはひきつった笑みを浮かべた。

さぁぁ…と血液が下へ下へと降りていく音を聞いた。冷たい汗がダラダラと背中に流るのを感じる、その時に本能が嫌でも察した。察してしまった。今自分は、救い様もない程に絶体絶命なのだと。私は目の前が真っ暗になった。

ああ、何故こんなにナイスタイミングなのだろうか。何も幻想郷へ帰ってきたその当日にかち合うことなんてないじゃないか、もう数百年程は地獄の果てまで逃げる気満々だったのに。まだ心の準備だって何も出来ていない。

急展開すぎるこの再開に何処と無くきな臭さを感じる。カイレインは悟った。そうか、これがご都合主義というものなのか。

「何故こちらを向かないのかしら?」

カイレインの小さな姿に落とされた黒い影。太陽と彼女の間に割り込んできた影の主が、手に持っていた傘をいじりだした。その行動一つ一つがまるでカイレインを追い詰めているような錯覚すら覚える。いや、実際そうなのかもしれない。

現在進行形に続いているパニックと、テンパりまくった余裕の無い彼女の心に、酷く冷たく、鋭い殺気を孕んだ声が容赦無く降りかかる。カイレインは少しだけ、泣きそうになってきた。

いつまでも固まったまま振り向こうとしない彼女に痺れを切らしたのか。幽香はがしり、とカイレインの小さな頭を鷲掴みにし、指が食い込むようにギリギリと力を込だした。爪を立てられていないところは、彼女のちょっとした優しさなのだろうか、しかしカイレインの頭蓋骨は陥没しそうな勢いでミシミシと悲鳴を上げていた。

「い…、だだだだだだ！　ちょ、やめ、だっだだだだだ！」

絶叫のような悲痛な叫び。

必死に幽香の手首を掴んで、降りほどこうと抵抗を試みたが、何ということだろうか。妖怪の中でもそれなりの力を有しているはずのカイレインの足掻きにも、その白く細い腕はピクリとも動かない。その上、更に力を込めて握ってきた。

「ぴぎゃぁぁぁぁあああああああああ！！」

洒落にならない奇声を上げ、暴れまわる。限界が近いのか、火事場の馬鹿力か、カイレインは普段の比べ物にならないスピードと威力の入った蹴りを器用に腰を捻りながら放った。

風を斬るゴゥッ、と言う音がする。そこら辺の妖怪なら、一瞬にして弾け飛びそうなほどの威力を持ったそれは、しかし相手に当たることは無く空振りと終わった。

蹴りの威力をそのままに、体を半回転させるために使ったカイレインは、対面する人物を恐る恐ると仰ぎ見、ひっ、と小さく悲鳴を上げた。

そこにいたのは、やはり予想通りの人物。四季のフラワーマスター、風見幽香その人であった。

「久しぶりね、カイレイン」

緑色の美しい髪を太陽の光で輝かせ微笑む。ただしその笑みは、見る人を惹き付ける優しさ等は微塵もなく、見る人を泣かせるサディスティックなものであった。

弓のように口の両端を吊り上らせて、嗜虐的な色を湛えた瞳はすぅ、と楽しそうに細められていた。

「ひ、久しぶりなのですね、幽香…、なっな何故ここに？」

無理をした笑みを称えたまま、気まずそうに上目遣いで彼女、幽香を見上げた。その姿はまるでいたずらのばれた子供のようだった。

「あら、可笑しなことを言うのね。私は花の妖怪、花のあるところへだったら何処へでも行くことが出来るわ。…それに」

幽香は一度口を閉ざし、ちらり、と視線を自分とカイレインを包むかのように咲き誇っている、真っ赤な彼岸花へと移す。

「普段大人しいこの子たちが今日はやけに嬉しそうに騒いでいたから様子を見に来たのよ。貴女は、この子達から好かれているもの。もしかしたら、と思って」

「そ、そうですか」

「ええ、この子たちには感謝しているわ。だってこの子達のおかげで、とても懐かしい友人に再会できたのだから」

にやにやと寒気のする笑みを更に深めた幽香はゆっくりと一歩を踏み出し、カイレインに詰め寄った。動こうにも動くことの出来な

いカイレインは身を強張らせたまま、軽く諦めの境地へと至っていた。大人しく幽香の洗礼を受けることが、今後幻想郷で穏やかに過ごすために必要だと悟ったからだ。

そんなカイレインの心境を知ってか、知らずか、当の幽香は焦らすようにゆっくり、ゆっくりと手を伸ばし、カイレインが纏うローブのフードを手繰り寄せ、自分の目線の位置まで持ち上げた。地から離れた両足が力なく揺れる。

「私は本当に嬉しいのよ、カイン。貴女との再開がね。そう、それこそ今にも貴女の顔の形を変形させたくてしょうがないくらい。前に貴女と別れた時、次会う時には貴女を半殺しにして地面に埋めてあげようかと思っていたのだけれど、今の気持ちを表すにはそれでは不十分ね。だって、あまりにも長い時間が過ぎてしまったのだもの、私はずっと会いたいと思っていたのに。私に何の断りも無くこの幻想郷から消えてしまった貴女が悪いのよ、ねぇカイン？」

その瞬間、幽香の瞳が獰猛に輝く。大地震にでもあったかのような程に体を震えで揺らすカイレインは、その時確かに死を見た。大きく振りかぶった日傘は一度太陽の光で煌き、カイレインに向かってしなりながら叩き付けられた。そしてカイレインはピンボールのごとく大空へ跳ね上がった。

「アッ――――」

その後彼女がどのような惨劇に見舞ったのかは、書くことすら憚られる。だが、ちょうどその時、捕食のため近くに潜んでいた妖獣

たちが、あまりに濃密な殺気と妖気で一斉にショック死したということと、彼岸花畑に程近い空き地が、何者かによって抉られ、なぎ倒されまくり、まるで地獄絵図のような惨状になっていたことを、ここに記す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1422l/

東方王堕歴

2010年10月12日04時59分発行